

## 日本から飛び出し 大きな世界を見る

ルー大柴さん(以下■) 実は若いころ、青年海外協力隊にあとがれていました。高校卒業後にヨーロッパを放浪したんですが、日本に帰ってきたら、何をやってもうまくいかなかった。そんな時、協力隊のポスターを見つけて「知らない土地で新しいことに挑戦するのも悪くないな」と本気で考えた時期がありました。

鮫島弘子さん(以下●) 私は夢だったプロダクトデザイナーになれたはずなのに、ものすごいスピードで生産・消費されていくモノを見て「これでいいのか」と。もつと社会のためになるモノづくりってないのかなと考えてたどり着いたのが青年海外協力隊。あ、これだと。私の疑問を解決するヒントが、そこにあるような気がしたんです。

■ 昨年、エチオピアの小学校で体育を教えている協力隊員に会ったの

ですが、20代半ばなのにすっかり歩いてびっくりしました。「モノがないので、ボール一つでできるサッカーがいい。体を動かしながら、チームワークの大切さも学んでほしい」と話していました。そんな彼の思いを受けてか、子どもたちの生き生きとした表情が印象的でした。

● 私の派遣国もエチオピアだったんですよ。「いいモノを作りたい」と勇んで行ったのですが、最初はすごく苦労しました。小さいころに父親の仕事で開発途上国に住んだことはあったのですが、エチオピアはそれまで行った国の中で一番貧しかった。そんな国でデザイナーとして私ができることは何だろうと、最初の数カ月はももんとしていました。

■ 協力隊の皆さんは、そこから立ち上がる力がすごいよね。世界一暑いと言われるジブチに行った時は、「エアコンもないし、洗濯もすべて足踏みなんですよ」なんて、協力隊員の方が笑いながら話してくれた。みんな本当にたくましいし、「この国に少しでも

何か残せれば」と真つづくなんです。● 現地の人の変化を感じた時、それまでの大変さはすべて吹っ飛んでしまします。エチオピア人の職人たちがファッションショーを企画したのですが、深夜まで一緒に頑張って働いてくれた人もいた。「エチオピアにいれば、新しい技術やデザインに触れる機会が少ない。だからヒロコのプロジェクにかかわれて、それだけで幸せだし楽しい」と言ってもらえてうれしかったですね。彼女は革職人で、今のビジネスのパートナーです。

### ゼロから生み出す 力をはぐくむ

■ 同じ年代の子どもを持つ父親として、協力隊員の若者たちを見ると、彼らの方がはるかに大人だと感じます。異国の地に放り込まれて、自分自身について、そして世界のことについて、真剣に考えている姿には胸を打たれます。

● 私は自分で考えて動く力

## 巻頭対談

### ルー大柴さん × 鮫島弘子さん

# JICA ボランティアのリアル

開発途上国の人々の助けになりたい。

そんな志を胸に、世界各地で奮闘を続けるJICAボランティア。彼らは現地を見て、感じながら活動しているのだろうか。ルー大柴さんと青年海外協力隊OGの鮫島弘子さんに、その生の姿を語ってもらった。

■ 自分が置かれた環境の中で何ができるか、無から有を生み出すのが協力隊。ジブチで理科を教えている隊員は、廃材の段ボールに穴を空けて実験道具を作っていた。みんなに分かりやすく教えたいという思いが伝わってきて、子どもたちも心から楽しんで授業を聞いていました。トライ&エラーを繰り返して培われた「力」は、これからの日本を支えていく上でも頼もしいですね。

● もう一つ大切なのはコミュニケーション能力です。協力隊は草の根レベルで活動するので、現地語の習得は不可欠。マイナーな言語も多くて苦労することも多いのですが、ジェスチャーを交えながら、一生懸命に伝えようとすれば相手も聞いてくれる。そうして相手との距離が縮まるんですね。

■ 僕が海外を放浪している時もそうでした。最初は英語もあまりできず、

何でもイエスと答えていたけど、それじゃダメだと。完璧でなくてもいいから、まずは伝えようとしないと分かってもらえないと気付いた。言葉と体で表現しようとする能力と姿勢は、帰国後も大きな武器になると思います。

### 苦しみの先にある 成長と喜び

● 協力隊から帰ってきて、自分のできることは何か、ずっと考えています。そして2012年2月に「Made in Ethiopia」という革製品を扱うブランドを立ち上げました。ほとんど知られていませんが、エチオピアの羊の皮は実は世界最高峰の質。協力隊の時に培ったネットワークを生かしながら、現地に工場を建設して製造までを行っています。

■ このバッグは本当に触り心地がいね！日本で見ることがないし、オリジナリティーがある。現地の雇用にもつながっていて、エチオピアの事情に詳しい鮫島さんだからこそできるオンラインワンのビジネスですね。  
● 「アフリカの人を助けるために買

ってあげよう」という考えでは、長期的なビジネスにはつながらりません。私のこだわりは、買う人に長く使ってもらえる「ホンモノ」を、現地の人たちと協力しながら作る。大変なことも多いですが、やっと一生かけてやりたいことを見付けました。

■ 帰国しても途上国とつながって、お互いにとって、さらに良い関係が生まれるのは素晴らしい。「井の中の蛙大海を知らず」。日本の若い人たちにも、鮫島さんのように、失敗を恐れずにどんな外に出て行ってほしい。日本で悩みながら暮らしているのなら、途上国に行って、思いっきり恥をかいて涙した方が成長できるんじゃないかな。

● ルーさんは生まれ変わって協力隊に参加するとしたら、どの国でどんなことをしたいですか？  
■ 僕は人生のいかなる時も「縁」を大切にしたいから、どの国でも、どんなことにも挑戦してみたい。そんな予期しない運命を楽しんでいきたいですね。



エチオピアでの協力隊員時代、「Made in Ethiopia」をテーマにしたファッションショー

鮫島弘子 株式会社 andu amet 代表取締役 / 青年海外協力隊 OG

東京都出身。国内メーカーのデザイナーを経て、青年海外協力隊(デザイン)としてエチオピアとガーナで活動。2012年2月に株式会社 andu amet を立ち上げ、エチオピアの皮革を使ったファッション製品を製造・販売。日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2013」キャリアクリエイト部門受賞。



エチオピアの体育隊員と出会う「日本の若者はたくましい！」

鮫島さんがプロデュースしたエチオピア産のバッグを手にするルーさん



ルー大柴 タレント

東京都出身。1977年に俳優としてデビュー。2007年にNHKみんなのうたでエゴソング「MOTTAINAI」を発表。財団法人日本ユニセフ協会の世界手洗い大使、ODA広報番組「地球VOCE」の海外レポーターを務めるなど、社会貢献活動にも積極的に取り組む。